



執筆 ▶ 葉山 靖明 ● (株)ケアプラネット
「デイサービスけやき通り」代表取締役

突然の発症 41歳で デイサービスに

皆さん、はじめまして。福岡の葉山と申します。今回から始まるこのコーナーは、私が9年前に脳内出血を発症し、要介護2になり、介護保険の利用者だった思い出を書き綴ります。

今はその頃の経験を生かし、地元でデイサービスを経営、リハビリの学校で講義等もして、生計を立てています。ですが約2年間、介護保険の要介護認定者として過ごしました。

まず第1回は退院直後の心境を思い出して、一生懸命書いていきます。私の経験を、ケアマネジャーの皆さんのお仕事に生かしていただければ幸いです。



社会の中で 迷子になった男

きっと、あの頃の私は、「社会の中で迷子になった男」だったのでしょ。

2006年、私は40歳で脳内出血を発症し、右片まひ後遺症を残したまま退院し、41歳で自宅に戻り、家族と暮らし始めました。勤め先の会社では休職扱いで「職」はありましたが、社会での「存在」はありませんでした。

その頃の法律によって発症後6カ月で通院は打ち切りとなり、医師から介護保険のデイサービスに行くために、まずは、「介護認定の調査」をしてもらうように言われました。すぐに市役所の

方が来て、多くの質問をされ、調査の結果、要支援2の認定が下りました。

地域包括支援センターのケアマネさんが決まり、最初の自宅訪問。その方はさばさばとした口調で話し、優しく、人の芯を支えるような、そっと私の背中を押してくれるような方でした。そのケアマネさんがそうかしこまらずにしてくれたおかげで、私は心を開き、本音で語ることができました。

仕事の話、病気の話、病院の話、家族の話、旅の話、陶芸の話、妻と3人でリビングのソファで時々、窓の外を青い空を見ながら、私の人生の物語をケアマネさんに語ったことを覚えています。結局、私は41歳で、一般的な高齢者が通うデイサービス、つまり通所介護施設に通う計画になりました。

デイサービスへの通所初日に赤いジャケットを着て一本杖を持ち、玄関前で立って待ちました。デイサービスの軽乗用車が停まって、高齢の方が座っているシートの上に座り、デイの人の手でシートベルトを「カチッ」と締められました。その瞬間から“現実”が理解でき始めました。私の人生の物語は、とても軌道が変わったのだと思わざるを得ませんでした。

週2回のリハビリ目的の通所を始めるのと、知らない世界に戸惑いながらも、高齢の片まひ者をフロアで多く見かけ、複雑な心境になりました。

①自分より症状の軽い人を見て、うらやましく、目標になる反面、ねたみの

葉山 靖明 はやま やすあき
1965年福岡県生まれの50歳。専門学校で法人税法及び簿記論の講師を務める。2006年、40歳のときに左脳脳内出血発症し右片まひに。翌年それまでの職場を辞して(株)ケアプラネット設立。現在は、デイサービス経営のかたわら講義・講演活動を継続中。社会福祉法人「夢のみずうみ村」理事。人間科学修士



その頃、通っていたデイサービスの機能訓練リハビリルーム。
当時の私の心象風景と重なるのです

ようなすねた心理になり、②自分より症状の重い人、具体的には片まひ者で車いすまたは片まひ者で失語が激しい人を見て大変そうだなとお気の毒に思う反面、自分がそこまで悪くなかったことに安心感を抱いたり、③片まひ者が多くいる現実を目の当たりにして、「みんな生きていっているんだなあ…」と不思議な“納得のようなもの”を覚えました。そういった心理の中でデイサービスに通い、日々を過ごしました。

週2回の通所で4週間が過ぎれば、ひと月。そうすると、ケアマネさんが、また自宅へやってきます。私は、デイサービスで見たこと、起こったこと、感じたことを語りました。とりとめもない話だったり、目を潤ませるような悔しい話も、身体機能が良くなるうれしい話もありました。



「物語」を聴く ことの意味

医療の世界は「科学的理解」に満ちていますが、人が病を持って生きる上においては「物語的理解」が主役となると、野口裕二氏は『物語としてのケア』（医学書院、2002年）をにおいて説いています。私にとっても、片まひの医学的アセスメントよりも、わが身の上になにが起きて、何を感じて、今日が過ぎ、夜を迎え、朝が来て、どう日々を生きてゆくかが現実問題として大切でした。

その物語を語る相手としてのケアマネさん、そして「理解」は、とても大切でした。

デイサービスで私が感じたことを言

語によって、月1回、ケアマネさんに“語る”という行為は、私のひと月を振り返り、言葉で躊躇や前進を語り、現状を認識する意味でもとても大切だったのです。

また、ケアマネさんは驚きながら私の話を真剣に聴いてくれました。もしかすると同様の片まひ患者の“語り”や“変化”の場に以前、遭遇したのかもしれませんが。しかし、このケースでは「片まひ者の物語」ではなく、「葉山の物語」として、心の耳を傾けて聴いてくれたのでしょうか。それは野口氏の説く「無知の姿勢という専門性」であって、ケアマネさんの業務知識上、普通に行っていることであっても、知らなかったことのように、初めて聴くことのようにしてくれることに、私は救われたのでしょうか。

ケアマネさんは、決して対象者の生活を見て、アセスメントやプランニングをするのみの人ではなく、この稿の前半で書いたような“物語”、つまり、私の新たな“人生の物語”を心で聴いてくださり、「物語的理解」をしてくださり、「社会の中で迷子になった男」である私を支えてくださった大切な人なのです。

物語を聴く人としてのケアマネさんに心から感謝します。

今月の私

「男の片手料理」にハマっています

写真は、専門職や当事者が協働で行っている「片手の料理教室」にて。豆腐ハンバーグもお椀二つを使って、こっぴやく作るんですよ。

梅シユースも。
写真は、専門職や当事者が協働で行っている「片手の料理教室」にて。豆腐ハンバーグもお椀二つを使って、こっぴやく作るんですよ。

「さあ、いくぞー！」
ガスコンロのグリルでスベアリブ焼き、焼き手羽先のレモン添え、ヒレカツ。鍋で鯛のアラ炊き、イサキの煮魚も。冷製トマトスープにワイン寒天。最近梅酒、梅サワー、

再び火がついてしまいました。妻に許しを得て、台所の調味料などを左手で使いやすい配置にして、左手に包丁を持ち「さあ、いくぞー！」

元

来私は「厨房に入る」男子でした。病気を

